

長野県立歴史館たより

2024年 秋号 vol.120

特集

描かれた川中島合戦 ～屏風・錦絵にみる戦の世界～

謙信 信玄 太刀打

鬼小島 渡船

日杆 包兵 清

11月3日(日)、当館は開館30周年をむかえます。

開館30周年 秋季企画展

会期:2024年(令和6年)10月12日(土)~11月24日(日)

描かれた川中島合戦

～屏風・錦絵にみる戦の世界～

はじめに

2024年(令和6年)は、『甲陽軍鑑』の記述を基にすると、第5回の川中島合戦があった年から460年にあたります。この合戦については、甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信が信濃の領有権をめぐって戦ったことで知られています。地方大名同士の領地争いにもかかわらず、その知名度は「関ヶ原の戦い」や「大坂夏の陣」に匹敵するほど高いのですが、

その理由は、江戸時代に隆盛を極めた甲州流軍学にあります。その基となったのが、武田



川中島合戦図屏風(部分) (当館蔵)

信玄・勝頼についての軍記『甲陽軍鑑』です。江戸時代には多くの人々に読まれて大ベストセラーとなりました。この軍記の最大のハイライトが、信玄・謙信両雄が直接あいまみえた一騎打ちですが、そのシチュエーションは様々です。

違う設定で描かれた一騎打ちの場面

第4回合戦の乱戦の中で、大将同士の一騎打ちがあったとされています。武田の本陣に駆け入った謙信が、床几しょうぎに座る信玄に馬上から太刀を振り下ろし、信玄はとっさに軍配で受けたのが『甲陽軍鑑』の語る1561年(永禄4年)8月の合戦の場面です。

一方、『北越軍記』では永禄4年ではなく、1554年(天文23年)8月18日の合戦であり、戦いの展開も『甲陽軍鑑』の記述とは全く異なり、川の中に騎馬で乗入れた両雄が太刀と太刀で斬り合ったことになっています。

年代が異なるだけでなく、一騎打ちがあった場所も『甲陽軍鑑』では八幡原ですが、『北越軍記』では御幣川おんべがわとしています。

『甲陽軍鑑』を基に描かれたのが「川中島合戦図屏風(岩国本)」で、『北越軍記』などを基にして描かれたのが「川中島合戦図屏風(紀州本)」です。現在当館所蔵の「川中島合戦図屏風」も含め、国内では6本が知られています。そのなかで特に有名なのが岩国本屏風と紀州本屏風であり、今回の企画展では貴重な屏風を展示し、川中島合戦の描かれ方に注目します。

柏原美術館蔵「川中島合戦図屏風」

岩国本と称される屏風で、右隻では武田軍の陣立てを描き、名前が判別できるのは大将の信玄と山県昌景まさかげだけです。左隻では1561年(永禄4年)の八幡原の合戦を描いています。岩国本では『甲陽軍鑑』の記述を忠実に絵画化し、狩野派の絵師による作品と推測され、成立は17世紀前半(寛永年間)と思われます。



川中島合戦図屏風(部分) (柏原美術館蔵)

和歌山県立博物館蔵「川中島合戦図屏風」

紀州本と称される屏風で、右隻には1554年(天文23年)の合戦において、謙信と信玄が御幣川の中に馬を乗入れ、太刀と太刀で斬り合う場面を描いています。上杉軍の有利に展開し、大勝利

の場面が描かれています。『北越軍記』等上杉方の軍記を基に制作され、越後流軍学者^{うさみさだすけ}宇佐美定祐が関与したと伝えられています。発注者は紀州徳川家初代藩主^{よりのぶ}頼宣で、狩野派の絵師による作品と推測され、成立は17世紀中頃(寛文年間)と思われます。



川中島合戦図屏風(部分) (和歌山県立博物館蔵)

意図して制作された屏風

江戸時代になると軍学が発達し、戦国時代の合戦を分析するようになりました。しかし、軍記や兵学書だけでは飽き足らず、大名たちはかつての合戦に思いを馳せ、軍記の記録を参考にしながら、絵師に要望を出したと考えられます。そして、描く絵師達にとっても、依頼主に対して自らの力量を示す絶好の機会だったのです。

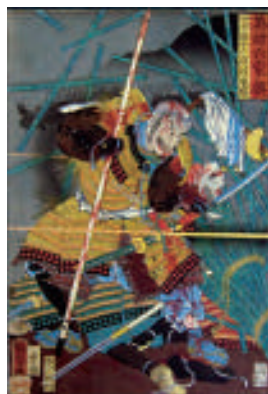
今回展示する屏風も発注者の要望と、絵師のデフォルメがみられる芸術作品として位置づけられるもので、合戦そのものを物語る同時代の史料とは様相が異なります。つまり、合戦図屏風は、何らかの意図の基に制作された作品で、それらが現在に脈々と伝わったものなのです。

人気を博した錦絵ブーム

江戸時代には川中島合戦は多くの浮世絵や錦絵の題材となり、歌舞伎や人形浄瑠璃のテーマにもなって江戸の人々のあいだに広まっていきました。その理由の1つとして、幕府が行った体制保持の施策に、織田信長、豊臣秀吉政権以後の徳川家に関して記してはいけないという規則がありました。

この規制の結果、信長、秀吉より前の最も近い一大事件が川中島合戦であったこと、幕府が甲州流軍学を採用していたことから『甲陽軍鑑』など様々な軍学書が広く読まれていたことが考えられます。

そのなかで軍記等に登場する英雄や武者を描いた、いわゆる武者絵を得意とした浮世絵師の歌川国芳の一門を中心に、武田、上杉両軍の手に汗握る戦いが、臨場感あふれる描写で多く世に出されたのです。



英雄六家撰 山本勘助入道 (当館蔵)

屏風が訴えること

乱世から泰平な時代へと移ると、大名は師事する軍学が過去の戦で圧倒的に強かったという印象を絵の中に残すことを求めました。そこには、政治的な意図が含まれ、勇猛さと同時に、反面としてやられる者が描かれ、残虐な場面も描かれています。「川中島合戦図屏風」には美談だけでは語ることのできない世界も描かれているのです。屏風や錦絵を鑑賞するにあたって歴史の暗闇を直視することは、過去の過ちを繰り返さないよう現代を生きる私たちに不可欠な視点を問いかけているのです。

今回の企画展では、この他、クラウドファンディングで購入した「武田晴信書状」や「川中島合戦枕屏風」(いずれも当館蔵)を初公開します。また、新潟・長野・山梨の3館連携として山本勘助の存在を明らかにした「武田晴信書状(山梨県立博物館蔵)」や第4回の激戦の後に出了れた「上杉政虎感状(重要文化財 新潟県立歴史博物館蔵)」なども展示します。第2展示室では2つの屏風に描かれている信濃の武者を取上げ紹介します。ぜひ御堪能ください。

註) 信玄、謙信については年代によって信玄=晴信、謙信=景虎等と名乗りましたが、ここでは信玄、謙信に統一させていただきました。

(黒川 稔)

青年は平和運動を如何に推進すべきか



図1 B5サイズほどの紙が綴られた議事録（当館蔵）

標題のように題する議事録（図1）が、長野県連合青年団関係史料にあります。表紙も年月日もなく、30枚程の白紙の綴りにペン書きされた同資料。一体いつ書かれたのでしょうか？

長野県連合青年団（以下、県連青）は、終戦の混乱と荒廃の中、農村の青年たちが中心となり1946年（昭和21年）2月22日、全国に先駆けて再結成されました。農村社会の自治・民主化を目指した共同学習活動や、合唱・演劇などの文化活動、浅間山米軍演習地化反対、原水爆禁止、60年安保闘争等、平和主義に立った社会運動にも積極的に関わっていきました。

この議事録は「県連青／。戦争と平和についての／現代史年表／。日青協規約／他雑文書」（／は改行）とマジックペン書きされた茶封筒（図2）に入っていました。年末詳のこの議事録は、雑多にまとめられた平和運動関係の資料の中で、「雑文書」として埋もれていたわけです。

昨晚解散された四月十九日に選挙が行われる衆議院に平和運動推進と云う最大の焦点を合せなければならん考える、（中略）四月十九日の投票日には吾には平和憲法を忠実に守るなどの候補者に投票し、再軍備を提案する候

補者に絶対に投票しないと決議すべきであると思う

という発言があることから、首相吉田茂が行なっていたいわゆる“バカヤロー解散”（3月14日）に伴う第26回衆議院議員総選挙があった1953年（昭和28年）のことと推定できます。

のちに県連青が編さんした『長野県青年団運動史』（1985年、以下、『運動史』p.76）によれば、1953年（昭和28年）3月14日・15日の第2回郷土振興大会において、中信ブロックから同名の議案が提出され、討議の結果、再軍備反対や平和運動の推進などが採択されました。同資料標題の右上にも「（中信地区提案）」とあるので、3月15日の議事録と見て間違いのないでしょう。

注目すべきは、このタイミングです。この大会の直後、同年4月にいわゆる浅間山麓米軍演習地化問題が浮上し、7月に撤回されるまで、県民一丸となった反対運動が展開されることになりますが、この問題が起こる以前からすでに、平和主義の立場から再軍備反対の声が、県連青内で高まっていたことを物語ります。

比較的整った議事録には所々、音を通じた誤字や、漢字不明のためか欠字にルビだけを振った箇所も見られ、記録担当者がその場で書き留めたか、それに近い清書前の段階の記録であることが分



図2 資料が入っていた「雑文書」封筒（当館蔵）

ります。『運動史』には記されない具体的なやり取りが記されているこの議事録は、当時の青年たちが、平和な社会を築くために、本気で考え議論し、政治を変えて平和な社会を守ろうと闘った証なのです。（鈴木 実）

諏訪市フネ古墳出土の蛇行剣から何がわかるか

2023年（令和5年）1月26日（木）の新聞各紙は、奈良市富雄丸山古墳の送り出し部に造られた埋葬施設（粘土槨に割竹形木棺）内から出土した全国初の発見となる盾形銅鏡と、鉄剣としては東アジア最大で、国内最古となる蛇行剣（全長237cm、幅約6cm）の記事を掲載しました。

蛇行剣はこれまで全国で85例が確認され、南九州に多く分布し、関東以西に散在していますが、シナノでは4基の古墳から6本が出土しています。北から中野市七瀬の七瀬双子塚古墳（2本）、同草間の京塚古墳、千曲市倉科の倉科2号古墳、諏訪市神宮寺のフネ古墳（2本）です。

フネ古墳は5世紀前半に諏訪地域で初めて築造された古墳で、墳形は東西15m、南北25mの変形小形の方墳です。埋葬施設は粘土槨に割竹形木棺が東西に二基並列していました。蛇行剣は東西割竹形木棺の外側に各1本ずつ計2本が副葬され、西割竹形木棺内には変形獣文鏡が副葬されていました。フネ古墳出土品は、1990年（平成2年）に長野県指定文化財「長野県宝」に指定されています。

蛇行剣が副葬されていた時代は、富雄丸山古墳は4世紀後半ですが、多くは古墳時代中期の5世紀前半から中頃を中心に副葬されています。

富雄丸山古墳出土蛇行剣の長さは全長237cmと特別ですが、これまで発見された蛇行剣の長さは、島根県五反田3号古墳出土蛇行剣の27.6cmから奈良県北原古墳出土蛇行剣の89.1cmです。

蛇行剣の性格、そして保有の意味ですが、4世紀後半にヤマト王権がクニづくりを進める中で、龍や蛇を水（治水や雨）の神とする信仰を受け入れ、軍事と水に関わる祭祀（水祭祀）を掌握した結果、水祭祀の象徴として蛇行剣を利器としての

剣ではなく呪術的な役割を目的とした剣として鍛造したと考えられています。そして古墳時代中期には、これまで軍事を担ってきた首長層に加え、新興勢力にも軍事と祭祀を一体として担わせるために、ヤマト王権が儀礼の道具として蛇行剣と青銅鏡を主とするセットを「配布・下賜」したと考えられています。

フネ古墳の埋葬施設は富雄丸山古墳の埋葬施設と同じ粘土槨に割竹形木棺を納め、先に示した全国の蛇行剣の長さを考えれば、出土した2本ともに70cm以上の長さであることから、ヤマト王権中枢に神事行為が認められた諏訪地域の振興勢力ではないかと考えられます。二基の埋葬施設は整然と並んでいることから同時埋葬の可能性が高く、二人の被葬者がそれぞれに入手した蛇行剣とも考えられます。

4世紀後半から5世紀前半のシナノの古墳時代を概観すれば、ヤマト王権とのつながりの中で、首長墓の形は前方後円墳、その埋葬施設は竪穴式石室で、このような時代背景の中にフネ古墳に埋葬された被葬者がいました。

フネ古墳が築造された諏訪地域に、前方後円墳が築造されるのは、6世紀中頃の下諏訪町青塚古墳の築造まで待たねばなりません。

フネ古墳の被葬者は諏訪湖の治水に関わる中で、ヤマト王権に認められ、方墳ではありますが埋葬施設として粘土槨に割竹形木棺の採用が許され、全長70cm以上の蛇行剣を下賜された傑出した人物と考えられます。（西山克己）



左：東槨出土
右：西槨出土
（諏訪市教育委員会蔵）

義仲をめぐる2人の文人たち

令和6年度夏季企画展「^{しっふう どう}疾風怒濤木曾義仲」を終えて

7月17日、今年の芥川賞が発表されましたね。大正期を代表する文豪^{あきたがわりゅう の すけ}芥川龍之介。その名を冠したこの賞は純文学の新人作家の^{とうりゅうもん}登竜門です。

その芥川が旧制中学生のときに発表したのが「木曾義仲論」(1910年)。その美文体による漢文の調べが高く評価されています。少しみてみましょう。

(前略) 彼の一生は失敗の一生也、彼の歴史は^{さてつ}蹉跎の歴史也、彼の一代は薄幸の一代也。然れども彼の生涯は男らしき生涯也。彼の一生は短かけれども彼の教訓は長かりき。彼の燃したる革命の聖壇の^{せいだん こうこう}霊火は煌々として消ゆることなけむ。彼の鳴らしたる革命の^{つのぶえ りゅうりゅう}角笛の響は嚙々として止むことなけむ。

彼逝くと雖も彼逝かず。彼が革命の健児たる^{しんこつとう せんざい なお}真骨頂は千載の後猶残れる也(後略)。

若き芥川は、このようにほとぼしるような筆致で、情熱的に義仲を論じています。義仲の一生は失敗の連続、幸薄き人生。しかし平家を倒した革命的な功績は消えることはないのだ、と。

ここで大河小説「安曇野」の作者でもある作家^{うす いよし み}で評論家の臼井吉見に登場いただきましょう。臼井は編集者として青年芥川のこの作品を初めて取り上げました(「木曾義仲論」をめぐる



芥川龍之介
(国立国会図書館提供)

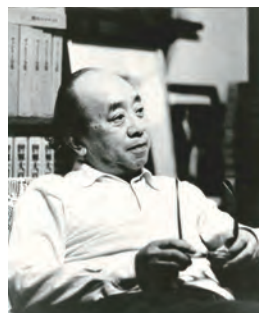
1968年)。臼井は、漢文の素養だけでなく、歴史への鋭い^{どうさつりよく}洞察力を兼ね備えた早熟の天才芥川に文豪としての素地を見だし絶賛しています。

さもありなん。芥川は当初歴史学者を目指した

と言います。さらに旧制中学時代の芥川が傾倒したのが日本主義の文芸評論家^{たかやまちよぎゅう}高山樗牛とされます。ジャーナリストが国民に向けてわかりやすく歴史を語りかける「史論」というジャンルがあります。この芥川の作品は、まさに大衆に向けた歴史の語りでした。若き芥川は「史論家」を一つの^{ロールモデル}理想論としていたのではないのでしょうか。

では、そもそも芥川が^{しよじょさく}処女作に木曾義仲を選んだ理由は何かだったのでしょうか。^{さいとうさねもり}斎藤実盛の死に涙する義仲。今井兼平や巴との別れ。直情径行で^{や せい じ}野生児とも言うべき「平家物語」など文学作品に描かれる義仲像は、確かに人間味のある人物として描かれ、魅力的です。

しかし、臼井はむしろ義仲のそうした個性だけではなく、義仲に「当代の道義を超越したる^{ただ}唯一個の巨人」としての側面を一介の中学生が指摘している点に^{どうもく}瞠目するので



臼井吉見
(安曇野市文書館提供)

す。あくまでも義仲の「生きた時代」を、前代と異なる価値観の時代への転換点として見ているのです。いわば義仲や「義仲的なもの」を通じて、王朝時代から武士の時代への変化を芥川が語らしめたのだと言えるのでしょう。

芥川は、義仲の一生から「教訓」を学ぶべきだといっています。現代において、過去の教訓を^{かがみ}「鑑」として、より良い社会を作り出そうとするのが歴史を学ぶ基本姿勢です。とすれば、この義仲が現代社会といかにつながっているのか、いないのか。芥川の言う「義仲の教訓」とは何だったのだろう。企画展を終えるにあたり、改めて考えている今日この頃なのでした。(村石正行)

冬季企画展

研究の窓

「佐久間象山遺墨展 ～書は人なり～」



佐久間象山ポートレート
(真田宝物館蔵)

2024年（令和6年）は、松代出身の儒学者で砲術や医学などの洋学にも通じた佐久間象山（1811～1864）が、京都で非業の最期を遂げてから160年の節目の年にあたります。象山は、学者・思想家と

してあまりにも有名ですが、中国文化に対する深い教養を持つ「文人」としても一流で、とりわけその書は生前より高い評価を受けていました。明治時代の医師で佐久間象山研究家でもあった宮本仲^{なかつ}（1856～1936）によれば、象山は「単純に書家としてのみ考えても、既に堂々たる大家の域に至ったと言うも、敢て過褒ではあるまい」といいます（『佐久間象山』）。

象山の遺墨は、地元松代町を中心に北信地域には数多く残されています。しかも、その年代が幼少期から晩年までに及ぶため、象山が若くしてあらゆる書法を体得していった様子を追うことも可能です。

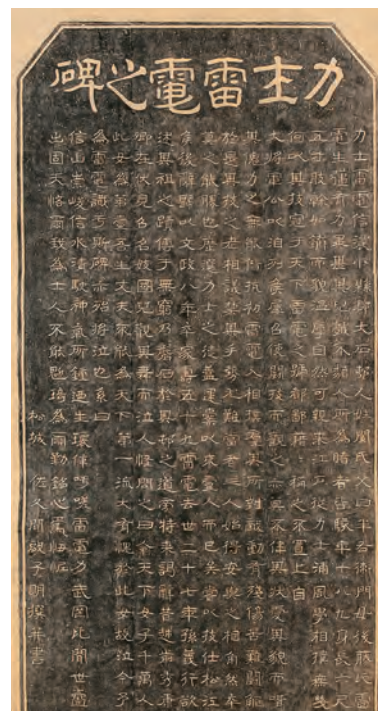
象山と書との出会いは幼少のころに始まります。父・国善は松代藩の側右筆を務め、その後表右筆組頭へと出世しています。幼少期より、能筆家であった父から書を習った経験が象山の基盤となったことでしょう。加えて、若くして中国東晋^{おうぎし}の王羲之^{がんしんけい}を手本に学び、さらに30代後半には唐^{そうざいじょう}の顔真卿「争座位帖」（拓本）を入手したのを契機

に、その作品は顔真卿の強い影響を感じさせる厳格で力強い書風へと変化しました。

一方、象山を支えた八田家、関家など地元の有力者など交流のあった人たちに宛てた書簡も数多く残されています。これらは、象山の日常をうかがうのに有効なだけでなく、その人となりを彷彿させる貴重な資料でもあります。

本展では多方面に活躍した象山の業績のうち、地元に残された書と文人画に加えて、私的な書簡とそこに記された実物資料を合わせて紹介します。これによって、書法を厳格に追究した幕末の文人としての側面と、日常を生きた人間としての象山を身近に感じていただきます。

（林 誠）



力士雷電之碑
(当館蔵)

会 期：

2025年(令和7年)1月11日(土)～2月24日(月・祝)

主催等：

主催 長野県立歴史館

協力 真田宝物館、台東区立書道博物館、驥山館

関連行事：

トークセッション 1月25日(土) 13:00～

登 壇 驥山館館長 川村龍洲 氏

台東区立書道博物館学芸員 中村信宏 氏

講演会 2月15日(土) 13:00～

講 師 真田宝物館館長 降幡浩樹 氏

INFORMATION

インフォメーション

2024年(令和6年) 2025年(令和7年)
9月～1月の行事予定

9月

休館日
2・
9～19
24・30

※9月9日(月)～9月19日(木)は全館くん蒸のため休館となります。

講座・イベント

県立歴史館出前講座
in大桑 9月21日(土)

考古学セミナー①
9月21日(土)

館蔵文書を読む会⑤
9月26日(木)

古文書講座
上級 第5回 9月28日(土)

県立歴史館講座④
9月28日(土)

10月

休館日
7・15
21・28

古文書講座
初級 A 第5回10月6日(日)
B 第5回10月3日(木)
中級 A 第5回10月5日(土)
B 第5回10月3日(木)

県立歴史館出前講座
in諏訪 10月5日(土) in箕輪 10月26日(土)

古文書探訪会(会員のみ)
10月10日(木)

考古学体験講座①
10月20日(日)

館蔵文書を読む会⑥
10月24日(木)

秋季企画展

描かれた川中島合戦 ～屏風・錦絵にみる戦の世界～
10月12日(土)～11月24日(日)

講演会① 10月19日(土) 「川中島合戦の真実」
当館特別館長 笹本 正治

講演会② 11月16日(土) 「絵画に見る川中島合戦」(仮)
山梨県立博物館長 守屋 正彦 氏

講座 11月2日(土) 「新・川中島合戦論」
当館文献史料課長 村石 正行

開館記念日(森將軍塚まつり)
11月3日(日・祝)

古文書フォローアップ講座
上級・中級 11月9日(土)
初級 11月10日(日)

アーカイブスカレッジ(申し込み者のみ)
11月11日(月)～11月16日(土)

考古学体験講座②
11月17日(日)

アーカイブス講演会
地域歴史資料の保全・活用・地域貢献
11月17日(日)

館蔵文書を読む会⑦
11月20日(木)

12月

休館日
2・9
16・23
29・31

クリスマスリースづくり
12月1日(日)

近世史セミナー
12月7日(土)

県立歴史館講座⑤
12月14日(土)

考古学体験講座③
12月15日(日)

館蔵文書を読む会⑧
12月19日(木)

1月

休館日
1～3
6・14
20・27

冬季企画展

佐久間象山遺墨展 ～書は人なり～
1月11日(土)～2月24日(日)



表紙写真の解説

川中島合戦図屏風(紀州本)

(江戸時代前期 和歌山県立博物館蔵)

和歌山県立博物館の「川中島合戦図屏風」は六曲一双の画面に、右隻に1554年(天文23年)の合戦と左隻に1556年(弘治2年)の合戦を描いたものです。写真の一騎打ちは右隻の6扇にあり、『北越軍記』等の上杉方の軍記物をもとに「御幣川に馬を乗りいれ、川の中での太刀と太刀との一騎討ち」のシーンを描いています。

行事アルバム

* 夏季企画展 疾風怒濤 木曾義仲 *
～文書と絵画でみる義仲の一生～



会期39日間を駆け抜けるように走り抜けた夏季企画展「疾風怒濤 木曾義仲」。寺外初公開の木曾義仲木像や東大寺文書、数多くの屏風・絵巻など来館者は熱心に観覧されていました。木曾の町村や小矢部市などから後援をいただき感謝申し上げます。立川談慶師匠の寄席や長村祥知先生の講演会、当館職員の講座のほかオリジナル缶バッジ配布や巴御前の顔出しパネルなど夏休みらしい取り組みも好評を博し、夏季企画展は無事盛況のうちに終了しました。

開館30周年記念 寄席

「源平盛衰記」

落語家:立川流真打 立川談慶師匠

立川談慶師匠の初蔵出し「源平盛衰記」。まさにこの企画展に合わせて下ろしていただいた演目です。師匠は上田市丸子のご出身。義仲ゆかりの地ということもあり、熱のこもった躍動感ある話芸に満員の会場の客席は圧倒されました。中入り後の第2演目は「柳田格之進」。映画「碁盤斬り」のもととなる古典落語。静かに聞かせる物語は、写実的であり、登場人物の動きの情景がまさに目に浮かぶ感動的な寄席となりました。



長野県立歴史館たより 秋号 vol.120

2024年(令和6年)8月29日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市大字屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 有限会社アツツロー